



大正デモグラフィ -歴史人口学で見た狭間の時代-

速水融、小嶋美代子著 文藝春秋 2004
(文春新書)

経済学部准教授 永島 剛

この本は「大正デモクラシー (democracy)」ではなく「大正デモグラフィ (demography)」にかんする本である。紛らわしいが、それだけに惹きつけられやすいタイトルだ。駄洒落のようでもあるが、じつは二つの用語の間には関連性がある。英語の demo という接頭語は「民衆」とか「庶民」などに関連する言葉に付くもので、たしかに「民主主義」を意味する「デモクラシー」はまさに「民」に関係している。大正時代 (1912 ~ 26 年) は、藩閥政治に対抗して護憲を標榜する政党が台頭したり労働運動や女性運動の萌芽もみられるなど、一定の民主主義の発露がみられた時代だとして、「大正デモクラシー」は歴史用語として定着している。

では、やや耳慣れない「大正デモグラフィ」とは何なのか。Demographyを英語の辞書でひくと、「人口学」とか「人口統計学」という訳語がでてる。「人口」の大多数は「庶民」である。やはり demo に関連していることがわかる。つまりこの本は、大正時代の人口にかんする本であるが、さらにいえば、人口の大多数を占める庶民の生活がどのようなものであったかを、人口データを手掛かりに考察している本なのである。歴史というと政治史や著名人物の事績などが中心と思われがちだが、社会を構成しているのは民衆なのであり、そこに焦点をあわせることは重要だ。

経済史上、大正時代は日本の工業化が本格化した時期である。そして関東大震災やインフルエンザ(スペイン風邪)の世界的流行がおこったのもこの時代だ。これらは社会や人々の生活にどのような影響をあたえたのだろうか。明治と昭和に挟まれて、注目されることが比較的少ない大正時代の社会や生活のあり方を、「人口」という視角から浮き彫りにしようとした本書は、ある時代・ある社会を多面的に考察しようとする際に興味深く、参考になる。これから大学で人文・社会科学を学ぼうとする諸君に一読をおすすめしたい。

① 禍いなるかな、法律家よ!

F. ローデル著 清水英夫、西迪雄訳 岩波書店
1964

② Woe unto you, lawyers!

Fred Rodell... New York: Berkley Pub.1980
(Berkley books.non-fiction)

法学部教授 小野 新

ここに紹介する本は、法学部の学生諸君にぜひ読んで欲しいという「必読書」ではない。そもそも「必読書」という形で特定の本を薦め、学生諸君に特定の本の内容をそのまま無批判に受け入れさせたいとは思わない。だから、この本も単なる私の好みに過ぎない。

イギリス法とアイルランド法を専攻する私が大学生の頃一時アメリカ法学の一潮流に傾倒したことがあった。1930年代に花開いた「リアリズム法学」という法学の一派で、いくつもの流れがあるが、共通しているのは、法の発展・運用における法の準則の役割に根本的な懐疑を抱いていた点である。裁判所がどのような判決を出すかの予測に当たって伝統的な形での法準則 (言うなれば、法律書の中に書かれているようなこと) はあまり役に立たないと主張し、さらに、裁判所の判決の基礎になる事実認定は誰が事実認定者であるかによって左右されるから、判決自体の予測も難しいと説く。法に安定とか確実性を求めるのは、父親に絶対的権威を見出そうとする幼児心理に等しいとも言っている。

この本の著者のF・ローデル (F. Rodell) もリアリストの一人で、1939年にこの著作を出版している。「部族時代には呪術師がおり、中世には僧侶がいた。そして、今の世には法律家がいる」という鋭い言葉で始まり、「医学、数学、社会学、心理学その他、自然科学、社会科学のどれ一つをとってみても、その目的が、前方を注視して、新しい真理、新しい技術、新しい効用に向って進むことにあることは、ひろく認められている。わずかに法だけが古来の原則や先例をかたくなに墨守して、革新を悪とし旧套を徳としている。変転してやまぬ社会の要請に応ずるためには、たえず古くさくなった方法を改めていかねばならぬ、という考え方に、法のみが抵抗している」と、刺激的な文章が続いている。司法試験だけを目指しているような「伝統的」な法学部の学生諸君に読んでもらいたい本である。

